

視察先別報告 東ティモール

【青年海外協力隊】

義肢装具士・製作隊員、作業療法士隊員活動現場視察

概要

<義肢装具士・製作>障害者への支援が立ち遅れている東ティモールで唯一のナショナルリハビリテーションセンターでは、人材不足や義肢装具の材料不足に悩まされている。同僚スタッフたちとともに義肢装具製作を行い、製作過程における技術向上と製作環境の改善、さらにはコミュニティでのより良い義肢装具の利用環境を作るための指導を行っている。

<作業療法士>作業療法士の技術力はまだ十分とはいえず、作業療法資格を持たないアシスタントを中心に技術指導が行われているのが現状。技術・サービス向上と、コミュニティへの作業療法提供プログラムの改善に貢献することが期待される。

01 大浦 正人 保健福祉の制度が整っていない中で、自分自身の無力を感じながらも、少しでも東ティモールでこの現状を何とかしたいという思いでひたむきに事業に取り組む青年海外協力隊2名の姿が強烈に印象に残りました。目の前のリハビリや義足の必要な人に力の限り働き、それを喜びとしている日本人を肌で感じる事が出来ました。障害者の地域に根ざしたリハビリテーション（CBR）部門は、周囲に理解されないのが実働していないのが現状でした。国が創られていく過程とは、失敗を繰り返しながら試行錯誤し、前に進んで行く終りのない果てしない道を歩いていくようなことなのでしょう。

02 太田原 奈都乃 東ティモール特有の障害者像が見えてきた。彼らが抱える問題は、彼らの障害による責任ではなく、社会全体の問題である。例えばま農村部では義足の子どもの険しい山道を越えて学校に通わなくてはならない現状がある。この場合、農村部での学校教育と医療サービスの充実を図る国際協力が相互に連携し合うことで、現地の困難が初めて解消し得る。

03 川辺 絵梨 生活様式によって人間の動作は変わってくるので、奥深い現地の文化を理解しなければならない。また、ポリオなどの日本ではあまり見られない症例は、現地スタッフの方が経験や知識を持っており、彼らから学ぶことも多いようだ。残念だったのは、リハビリ後の社会参加に至るまでのフォロー体制があまり整っていない現状。せっかくのリハビリの効果を活かしきれない現状は、隊員にとっても辛く残念な現状だと思う。しかし、「利用者が歩けるようになったときは嬉しい瞬間だ」とお話してくださった松野隊員と浦山隊員。お二人の優しい眼差しと、目の前の課題にひたむきに取り組む姿勢が、とても印象的であった。

04 木村 みゆき 国際協力の最前線の現場で技術を持って支援する松野由恵隊員の姿勢に感動の一言でした。活動するには東ティモールの生活様式・文化・言語を知らなければ始まらないとホームステイを行ったそうです。当初、現地スタッフには技術指導を試みても女性に対する意識の低さから何も吸収しようとしてくれないと苦悩する日々が続いたそうです。その苦悩が「一緒に勉強しよう」と自分の姿勢を変えてみるきっかけになった、と語られました。その視点と行動力から熱く静かな本気度が伝わり、胸に迫るものがありました。また障害に関連する様々な事（行政・制度・しくみ）がフォローや継続的な療法を行うための弊害になっていることも知りました。夢は2020年東京パラリンピックで技術者とサポーターとして再会すること、という松野隊員。国際協力の現場から発信し、世界がつながっていく事こそ青年海外協力隊の使命であると思いました。

05 後藤 恵美 ナショナルリハビリテーションセンターでは、青年海外協力隊として派遣された若い2名が、理想と現実の中で悩みながらも自分たちにできることを考え、前を向いて一步一步進めている様子を感じることができた。私自身、若者の教育に携わる仕事をしているためか、ことさら興味深い訪問であった。青年海外協力隊としての悩みもがきながらの日々が“若者たち”を成長させていることを目の当たりにし、青年海外協力隊の魅力や意義を再確認することができた。このような若者たちの存在を、自分が日々向き合っている学生たちや多くの方々を知ってもらいたいと心から感じた。

The Democratic Republic of Timor-Leste

06

塩澄 志麻

「女性だからか、経験年数が少なかったからなのか、赴任してきた当初は、私から学ぼうとしてくれなく、悩んだ」と話してくれた義肢装具士・製作の松野隊員。支援する上で、壁になっているものとは、歴史、文化、言語であった。また、「アフターフォローや医療の連携ができていない」と現場の課題に気づきながらも手が打てず、葛藤しながら活動する同センターの浦山隊員。互いに理解し学び合うこともODAの現場に必要な要素だと感じた取り組みだった。

07

武田 義久

ディリ市内の交通量の多さ、交通規制がほとんど行われていない状況、そして紛争時代が長かったことなどが原因で、センターを利用している患者さんが沢山いることに納得した。患者さんの状況は交通事故による障害、糖尿病、先天的な手足の不自由さ、脳性まひ、ポリオなどであった。

小児用小型車椅子は、3カ月毎に30個がオーストラリアからの無料寄付、二輪車椅子は中国から、義肢装具は、スイスのジュネーブから購入していると、まさにODAの宝庫である。しかし、一方で、管理体制なども大きな課題であると感じた。また、松野隊員や浦山隊員は「立てるようになった。物が持てるようになった」という患者さんの言葉が一番うれしいと語っていた。しかし、隊員がセンターを離れた後のフォローが不十分であるため自立発展性における改善と患者さんが退所した後のフォロー体制が課題であると感じた。

08

田中 香織

障害者の方がリハビリや義足の製作を行うためのナショナルリハビリテーションセンターにおいて、治療費、器具代、治療のための宿泊代までが無料で提供されており、政府による支援が手厚いことに大変驚いた。しかしながら、そもそもそのような制度の存在が国民に知られていなかったり、交通アクセスの悪い地方からは施設まで通えなかったりと、運用面では課題が多くあるように感じた。また、当施設が東ティモールと同様に紛争経験国であるカンボジアでも支援していたNGOにより設立されていた点は興味深かった。紛争による怪我や先進国では流行しにくい病気への治療などについては、実際に対処してきた国の経験が活かせることは多いと思う。様々な国が協力し、自国の得意分野で支援を行っているのだと感じた。

09

藤島 誠人

ここは東ティモールで唯一の義肢装具作成とリハビリができる機関である。2人の青年海外協力隊の方が義肢装具士、作業療法士として活躍されていた。印象に残っていることは、「あるもので工夫してつくる」という言葉である。東ティモールでは、生活物資の約85%を輸入に頼っている。だから、義肢装具をつくる際にも輸入に頼ることになってしまい、金額が高額になってしまう。そのため、安く高品質の物をつくらうと思えばあるものを工夫して使用しなければならない。また、義肢装具をつくったり、リハビリを行ったりすることで障がい者のすべての問題が解決しないことを知った。義足をつけて歩けるようになったとしても、学校がものすごく遠い山の上にある環境や家庭環境などその他の問題も山積みである。

10

藤岡 裕巳

義足を作る現場を見せて頂いた。義足が必要な方々の多くは外傷（事故など）であり、最近では癌や糖尿病など病気によるものも多いという。一番驚いたのはセンター利用者の自己負担金なしというところである。しかし、この場所を知っている人が少ないことや、知っていても移動手段がなく来ることができない人の方が多いことも現実であり、いかにこの場所をPRしていくかが今後の課題であると感じた。また、作業について心掛けていることは、必ず現地スタッフと一緒に作業をすることだそう。教えることが大半であるが、現地スタッフから学ぶこともたくさんあると話していた。松野隊員に話して頂いた、この職業に就こうと思ったきっかけや苦労した話は、同じ女性として感じるものが多く、涙をこらえるのがやっとならった。